

「訪中国に参加して変化した心境」

2号車 A 班 青森中央学院大学 3 年 岡田瑠斗

訪中国へ参加する前の私の中国に対するイメージは優しい人がいないというものであり、あまり良い印象を持っていなかった。日常生活を過ごす中でメディアを通して伝わる中国はマナーの悪さや日本に対してヘイトスピーチととれるような言動をしているなどマイナスなものばかりであった。ですが、実際に訪中国に参加して見た中国は人に優しく思いやりを持って接してくれる人たちが多くいた。メディアを通して見ていた彼らの姿はごく少数なのだと認識した。改めて 5 月 24 日から 30 日の 1 週間で感じたことや学びを記述していく。

まず私が訪中国に参加する前に達成したいと考えていた目標は「メディアを通して感じていた中国に対する印象を捨て、自身の目で本来の中国の姿を見て感じる」というものである。訪中国の活動を振り返るとこの目標は達成されたと感じる。訪中前は中国は日本に悪い印象を持っている、無機質で優しさが無い、中国は怖い国という印象を中国に抱いていた。SNS で得た何の根拠もない情報を聞いて勝手にそう解釈していた。実際に中国に行ってみると感じたことは中国の人たちは親切で優しいということだ。声が大きい人もいたため怖いと感じていたがたどたどしい英語や中国語で話しかけるとゆっくりな英語や中国語で返事を返してくれたり、タクシーに乗った際には様々な建物の説明をしながら話しかけてくれたりと日本にいたら分からなかった印象を与えてくれた。

初日は上海のクルーズに乗り上海の街を遊覧したが高層ビルが煌びやかにライトアップされた上海の街並みが広がっていた。日本では見る事が無いようであろう幻想的な景色に驚きを隠せなかった。私が予想していたよりも中国の建造物はスケールが大きいということが分かった。中国といえば歴史がとても長く中国 2000 年の歴史という言葉聞いたことはあったが本当に中国の歴史は興味深いと感じた。日本のお寺と比較してみると小さな仏像が大量に彫られていたり、小さくそしてカラフルな模様がたくさんあったりと海を渡るだけで異なる文化の発展がみられた。

中国に来て特に驚いたことは中国での支払いの 9 割が電子決済サービスを用いていたことである。さらに、博物館に入場するのにパスポートを用いるのにも QR コードを使っていた。コンビニでも現金やクレジットカードが使えず現金を多用する私にとっては少し不便だなと感じたが、スマートフォン一台で予約から注文、支払いができるシステムは日本にはない独自のものであり、こういったところに中国の先進的な技術力を感じた。

改めて訪中前に私が中国に対して感じていたものは根拠のない戯言であると再認識した。実際の中国の姿は日本で過ごしていたら気付くことはなかったと感じる。私たち訪中国を温かく迎え入れてくださった方たちと関わることで中国の方たちの優しさを感じることができた。訪中国の経験を通して根拠のない話を鵜呑みにして物事を判断してはいけないということを学んだ。実際に中国に行きその目で中国という国を見ることができたのはとても

も誇りに感じる。私の後輩や同級生にぜひ参加してほしいと考えるようになった。このような経験をありがとうございます。

「中国から見た中国と、中国から見た日本」

2号車－A班 東北大学 笠原愛

私が今回の訪中国に参加したきっかけは、祖父が中国について偏見を持っていることを常日頃感じており、それが本当なのか自分の目で確かめてみたいと思ったからです。日本にいる間は中国について、日本から見た様子しか報道されず、様々な利害関係を抜きにした情報はあまり入ってこないと感じています。しかし、自分が実際に中国に行くと、素直な気持ちで今の中国について学びました。

まず中国に行って一番驚いたのは、EV自動車・EVバイクの普及です。街にでると大きな車は静かに走行し、その隣でたくさんのEVバイクがまるで自転車に乗るようにノーヘルメットで走行していました。その光景は私たちのイメージにある二酸化炭素を大量に排出し、まだまだ発展途上という光景よりもはるかに先進国の光景でした。地球に優しく、騒音も少ないEVが日本でももっと普及すればいいのにと純粋に思いました。また、キャッシュレス決済の普及にも驚きました。私は現金とカードしか持って行っておらず、QR決済しか使えない場面も多く困ることがしばしばありました。

次に驚いたのは中国の人の温かさです。日本にいる中国人はいつも怒っているように見える、声が大きくて威圧的などのイメージがありました。しかし、観光地に行った際に目が合った現地の方に手を振ると、にこやかに手を振り返してくれました。また、ツアーに同行して下さった随行員の方やガイドさんはみなユーモアにあふれ、いつも笑顔で、私たちに一生懸命中国の魅力を伝えてくださいました。現地の大学生との交流の際は、中国の雑技について私がどうやるのと尋ねたところ、英語と身振りで一生懸命教えようとしてくれたのが印象に残っています。

これらのことから、私が中国ととらえているのは中国のほんの一部分だったのだと気づかされました。私たち日本人は「爆買い中国人」や「中国人観光客」などと中国人をひとくくりにして考えていますが、日本人にもいろいろな人がいるように、国土が広く人口も多い中国人はなおさら多様な人たちがいるのだと思います。これからは何かにカテゴライズしようとせず、その人と直接話し、偏見を持たずに交流していきたいと強く感じました。

次に中国から見た日本についてです。まず結論から言うと、日本で食べていた中華料理は中華料理ではありませんでした。あれは日本料理中華風だったということに今回の旅を通して気が付きました。私たちがイメージする中華料理は肉汁があふれ出てくる小籠包や酸辣湯面のようなものですが、実際に中国に行って朝昼晩中華料理を食べましたが、私たちが考えていた中華料理はほとんど出ませんでした。日本で食べている中華料理は日本人のための中華料理で、中華風に味付けした日本料理だったのだなと分かり、もう日本で中華料理が好きですとは言えないなと思いました。

次もごはん中の話になってしまうのですが、中国のお店は高そうなお店でも接客がすごく適当で、私たちが飲み終わった空のペットボトルを振り回し、お皿もガンガン扱うような感じでした。それに対して日本では、どんな安い飲食店でも挨拶をしっかりとし、私語は慎み、物は静かに扱うのが当たり前となっています。店員さんの目線に立ってみれば中国のお店は働きやすそうですが、やはりもてなされる側になると日本のお店は気持ちがいいなと改めて感じました。これもまた文化の違いを感じられる出来事でした。

今回の訪中では、中立的な立場で中国の良いところ・悪いところ、日本の良いところ・悪いところを学ぶことができました。やはり、本物の中国は中国でしか感じられないのだと強く感じました。さらに、様々なバックグラウンドを持った個性豊かな同世代の仲間たちに出会えたことも大きな収穫でした。日常生活に戻ってからも、中国のこと、仲間が住んでいる地域のことなど、よりアンテナを強く張り日々を過ごしていきたいと思います。

「知らないことが原動力」

2-A 早稲田大学 加藤 凜

私が今回の訪中団に参加した動機は、大学生のうちにどこでもいいので海外に行きたかった、程度の単純なものだ。しかし元来フットワークが重く、海外経験もほとんど無いので、こんな機会でもなければ私のぼんやりとした願望を達成することはなかったかもしれない。貴重な機会を与えてくださった方々には感謝してもしきれない。

一週間の訪中の中で、普段はできないたくさんの体験をした。まずやはり中国現地の空気を肌で感じたことは大きかった。ホテルなどの建物それぞれの構造や内装は日本と非常に似ているが、外に出て街全体を眺めると各都市の気風の違いを感じられた。上海の群立する超高層ビルと遊園地のような夜景、古いマンションの窓から垂直に突き出た物干し竿たち。山西省の乾燥した涼しい空気、地肌が露呈した山々の間に突然現れる新しい街。北京の広い車線にぎっしり並ぶ自動車、そしてどこの都市でも大通りを駆け抜ける多数の自転車と E-バイク。写真や映像で見るのとは違い、自分の足でその地に降り立ち、自分の目で生きた人々を見て初めて、私は中国を現実の場所として実感できたのだと思う。

日本人、中国人を問わず多くの人と交流ができたのもとても良い経験だった。

訪中団の学生たちは、皆バイタリティに溢れていて、ただ旅を楽しむだけでなく、それぞれの目的や訪中団全体を有意義なものにするため精力的に活動していて、とても良い刺激を受けた。中国に対する関心の形も様々だったが、日本では話題にするのに気を使ったり、明らかな偏見に辟易したりする場面が多いだけに、現地で一緒に見た景色について素直な感想を交わし、一緒に同じ問題について考えられる時間はとても新鮮で楽しかった。すごく濃密な修学旅行のようだ。

中国の大学生の人たちとの交流も非常に楽しかった。私自身が中国の大学へ赴き現役の学生に校内を案内してもらうなんて、留学でもない限りなかなかできない体験だろう。山西大学で出会った外国語学院日本語学科専攻の学生は日本語だけでなく経済や中日の交易の歴史についても深く勉強しているそうで、その知的好奇心と行動力に驚かされた。

交流会以外でも、色んな現地の人と関わる機会があった。特に、引率をしてくれた中国対外友好協会の方や、それぞれの都市の案内してくれたガイドの方々。本当に優しい人ばかりで、皆中国のことを短い時間の中でも伝えられるだけ目一杯伝えてくれた。お土産の適正価格、世界遺産の専門的な知識、上海のマンションの相場など、ひとり旅では知り得ないことをたくさん教えてくれたおかげで、観光が何倍も面白くなった。

観光で個人的に一番楽しみにしていたのが山西省大同の雲崗石窟だが、これは完全に想像以上だった。1km に及ぶ遠大な石窟群は 5 世紀北魏の時代から 70 年かけて造り上げられたとガイドさんに教わった。巨大な仏像と四方の壁を埋め尽くす彫刻は、言い表せないほど壮観で、当時の人々の信仰の厚さや、造像に掛けた情熱の炎を感じた。私はもともとアジアの

宗教に興味があり、その方面で卒論を書きたいと思いつつ、テーマが漠然としすぎていて定まらず悩んでいた。あの石窟を見てから、少し指針ができた気がする。

最後に、訪中を終えて考えたことを敢えて纏めるなら、「中国のこと全然分からない」ということになる。中国は広すぎるし人も多すぎるし歴史も複雑すぎる。文化も価値観も地域や時代によって大きく変わるだろうし、関わった様々な人の考えも、正直数日や数時間で分かるはずもない。

「知らない」ことは怖いことだ。理解できない事象に対してはどんな姿勢で向き合えば良いのかも分からないから、人は取り敢えず未知の事象を既知の理屈の中に押し込んで安定を保つ。しかし、その繰り返しはいつか大きな認知のズレを生み、思考を縛るようになってしまう。それならむしろ、今「知らない」ことへの恐怖を、これから「知る」ための原動力にしたい。私は訪中から帰ってきて、やりたいことがたくさん増えた。中国語の勉強や仏教の勉強、これから何度も中国に行くにはどうすればいいか。知らないことを知らないままでいることへの焦燥や恐怖が、私の背中を押して前に進ませている。今私はとても楽しい。この感情を、色々な人に伝えたいと思う。

「本物の中国と深まった絆」

2-A 横浜市立大学 木村裕健

今回の訪中団で訪問する都市は、私にとって初めてであり、日本で抱いていた中国への漠然としたイメージを大きく覆す貴重な機会となりました。中国人民対外友好協会、および中日友好協会をはじめとする関係者の皆様、そして日中友好協会を通してこの素晴らしい機会を提供して下さったことに、心より感謝申し上げます。

上海、山西、北京という多様な都市を巡る中で、まず最も印象的だったのは、中国の圧倒的な発展とスケールの大きさです。上海の高層ビル群や黄浦江の夜景は、まさに「魔都」の経済力を象徴しており、そのきらびやかさと壮大さに圧倒されました。大手町をも凌駕するほどのオフィスビル群は、中国の急速な経済成長を肌で感じさせてくれました。また、山西省の広大な自然や、万里の長城の悠久の歴史も、大陸ならではのスケール感を実感するものでした。

先進技術の普及も驚きの一つでした。スマートフォン一つで予約から注文、決済まで完結するシステムは、その普及率において日本の比ではなく、日常生活の利便性を飛躍的に高めていることを実感しました。博物館のQRコード入場や、航空券とパスポート情報が紐づけられているシステムなど、随所で技術の進化が生活に溶け込んでいる様子が見て取れました。

文化面では、山西省の雲岡石窟や華嚴寺、晋祠、そして北京の故宮博物院といった歴史的建造物から、中国4000年の歴史の「深さ」を感じました。特に、北京の中日青年友好交流大会で披露された中国古典舞踊や武術のパフォーマンスは、中国ならではの魅力を存分に感じさせるもので、その洗練された美しさに心底感動しました。山西名物の刀削麺の美味しさも忘れられません。

今回の旅で最も心に残ったのは、中国の人々との温かい交流です。出発前はメディアからの情報や周囲の意見から、中国に対して少なからず偏見を抱いていました。しかし、実際に現地の人々と接してみると、彼らの親切さ、優しさ、そして率直さに触れることができました。残念ながら、中国の大学生と直接交流する機会は想定よりも多くはありませんでしたが、限られた時間の中での交流や、道行く人々とのふれあいを通して、抱いていたネガティブなイメージは完全に払拭されました。特に、人民大学の教室で学生たちと一緒に踊り、歌った時間は、言葉を越えた「中日和平」を肌で感じる事ができた、旅の中でも最高の瞬間の一つでした。

そして、この訪中団を通じて、私はかけがえのない日本の友人たちとの絆を深めることがで

きました。異なる大学から集まったメンバーとの一週間は、毎日が刺激的で、語り尽くせない思い出でいっぱいです。どんな時も私たちを気遣ってくれた韓さん、どんな話題にも柔軟に対応し場を盛り上げてくれた K さん、将来を見据えて積極的に行動する T さん、そして素晴らしいパフォーマンスをまとめ上げてくれた U さん、誰とでもすぐに打ち解けることができる N さん。彼らとの出会いと、共に過ごした日々は、私の人生において決して忘れることのできない大切な宝物となりました。

今回の訪中を通じて、私は「百聞は一見に如かず」という言葉の真の意味を痛感しました。メディアや情報に惑わされることなく、自らの目で見て、肌で感じるのが、物事を正しく理解するためにいかに重要であるかを学びました。この経験を活かし、今後も中国語学習を深め、将来的に日中友好の架け橋となるべく、自分自身を成長させていきたいと強く思います。今回の訪中団に関わった全ての方々に、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「中国の多様な文化共生」

2A 関東学院大学 口田斗哉

私が訪中を経験して率直な感想は、土地によってそれぞれの特色があるということだ。それは他国であったとしてもいえることではあるが、中国以上に現代と歴史、様々な伝統的な文化が多様化し共存している国は存在しないと考える。今回上海、山西省、北京に訪れ、中国は1つの大きな国家でありながら地域ごとに文化、言語、生活様式が驚くほど異なり、その多様性と共生のあり方に強い印象を受けた。

まずは、上海である。上海はイメージの中にあるような国際都市というべき場所であった。西洋と東洋が融合した建築、外灘に並ぶ高層ビルやその夜景、そして、多国籍な人々が行き交う街並みだ。中国の現代的な多様性を象徴していると感じた。そして、上海歴史博物館においてこれまでの中国の歴史や文化を学ぶ事ができた。特にこれまで知ることがなかった租界の時代からの歴史や伝統文化と近代化の歩みを学ぶ事ができた。展示物の1つ1つがより多くの歴史的背景を持っており、単なる観光地ではないということ、深い文化的な意味のある場所であるということを実感した。

次に訪れた山西省では、全く異なる中国があった。大同や太原などでは、歴史の重みを感じる古い街並みが残っていた。特に大同の街並みや平遥古城はほかの街並みとの異なりを感じた。また、太原では晋祠を見学し、中国古代の建築と伝統文化にふれることができた。そして、伝統的な宗教行事や方言が今も生活に深く根付いていた。雲崗石窟において強く感じることができた。5世紀に造られた仏教彫刻群には圧倒され、巨大な石仏と細かな彫刻からは、当時の宗教的信仰と文化的繁栄の背景が伝わる。

そして最後に訪れた北京では、中国の政治と歴史の中心であり、同時に多民族国家としての顔も持つ都市だった。今回北京では中華人民大学外国学院交流と中日青年交歓活動がメインであった。中華人民大学外国学院交流では学生に大学内を案内してもらい、お互いの文化を尊重したパフォーマンスを披露することなどによって貴重な体験となった。中日青年交歓活動では中国と日本の文化を披露することで相互理解を深めることのできる場となった。このような若者同士の交流は文化体験や共同作業を通して気づかれた友情は国を越えて日中関係をより良好にしていくために必要なことである。

今回の訪中を通じて私が学んだことは、中国の文化的多様性は単なる「違い」ではなく、「共に生きる力」であるということだ。政策としての共生だけでなく、人々の日常生活の中にある尊重と調和の精神が、それを支えているように思った。具体的には公共交通機関、大学のキャンパスなど日常のあらゆる場面において、人々が自然と共存している姿が印象的だった。すべてが理想的に機能しているわけではないが、宗教や民族、日常生活に関する課題も存在している。中国を訪れることで、私は「中国」という言葉にある複雑さと奥深さを実感した。そしてその中で、多様な文化が共生する現場を自分の目で見ることのできたことは、非常に貴重な経験となった。

「訪中がもたらした認識の変容」

宮城県日中友好協会推薦団員（2号車A班）

慶應義塾大学 環境情報学部 4年

久野 賢登

訪中を通じ、自身の認識に変容（インパクト）がもたらされたことは以下の3点である。

- ① 巡った中国の3都市とマクロ経済の関係
- ② 学生同士の相互理解の重要性（～体験した「日米」の学生交流と比較して～）
- ③ 今後の日中関係を如何にして築くか

以下、それぞれについて詳述する。

①巡った中国の3都市とマクロ経済の関係

上海、山西省、北京の3都市を巡る中で、特に住宅を中心とした不動産市況からくる重いデフレ圧力を肌で感じた。

どの都市でも個人的興味に基づき、住宅・不動産に着目し、日中と夜の様子を観察したが、特に夜の時間帯にその違いが明確に感じられた。上海や北京では、夜になると多くの住宅に灯りがともり、人々の生活の気配を強く感じた。一方、山西省では、ホテルから見渡す限り住宅の明かりがまばらで、多くの建物が空室であるかのように静まり返っていた。外見上は整備された住宅も多く見られたが、実際に人が住んでいる気配は薄く、供給に対して需要が追いついていない状況が伝わってきた。訪中を通じ、統計だけでは見えてこない「現場の空気感」を肌で感じる事ができたことは自分にとって非常に貴重な経験だった。

②学生同士の相互理解の重要性（～体験した「日米」の学生交流と比較して～）

日米関係と日中関係を比較したとき、政治的安定性や経済的相互信頼、文化的親和性の面では、大きな差があると認識している。実際、米国の学生とは、これまでに同盟国としての強固な信頼関係を背景に円滑で充実した交流を重ねてきた。しかし、今回の訪中において、そうした前提を覆すような体験をしたのである。同盟国ではない中国において、現地の学生たちとの交流は驚くほど自然で心地よく、深く、そして実り多いものであった。

現地では、多くの学生や若者と意見を交わした。特に印象的だったのは、互いに異なる歴史認識、言語や政治環境を背景に持ちながらも、対話を通じて多くの共通点を見出し、強い友情を築くことができた点である。中国の学生たちは、自国への誇りを持ちながらも、柔軟に日本人学生の意見に耳を傾け、未来志向の姿勢を持っていた。こうしたバイラテラルな対話

と友情は、将来の両国関係にとって大きな意味を持つと信じている。たとえ国家間の関係が複雑であっても、将来双方が社会を担う立場に立ったとき、学生時代に築いた相互理解の経験は、確かな信頼の基盤となる。とりわけ若者人口が多く、社会の活力に満ちた中国においては、こうした交流の希少価値と意義は非常に大きいだろう。

③今後の日中関係を如何にして築くか

これまで私は、今回の訪中を含め、学生として多くの貴重な経験を積ませていただいていた。得てきた機会の多くは、自身が「投資される側」として、多くの支援や期待を受けているからこそのものであると実感している。また、自立に向けた学生生活の終盤に差し掛かっている今、今後は「投資する側」として、これまでに得た知見や経験をどのように社会に還元できるかを真剣に考える段階へと移行しつつある。

社会人としてのキャリアが始まれば、私は金融や通商に関する分野に身を置き、日々の意思決定を通じて経済や社会に対して何らかのインパクトを与える立場になりたいと考えている。その中で、今回の訪中を経て私が抱いた、新しく、重要な目標は、日中間の人的交流をビジネスの観点からどのように増加させていくかという、大きな問いへの挑戦である。

国際化が進展する現代においては、国境を越えたヒト・モノ・カネ・情報の流通が加速している。その中でも私は、得意な領域から、日中間における人的・経済的交流をさらに活性化させる機会を創出していきたいと考えている。将来的には、得られた知見や経験、さらには一定の決裁権を活用し、日中間の民間交流の増加に直接的に貢献したい。

これまで多くの機会を与えられてきた私にとって「日中間の人的交流の増加」は、ダイナミックに社会へ還元する方法であると確信している。こうした取り組みを通じ、日中関係のさらなる深化に寄与していきたい。

以上（本文1650字）

「座学では分からなかった中国のリアル」

2-A 津田塾大学 栗原由実

私は今回、大学の訪中国の一員として、初めて中国を訪れる機会を得た。国際関係学科に所属していることもあり、これまで授業を通して中国の現代史や社会について学んできたが、それらの知識やテレビ・ニュースなどから得た印象は、あくまで“間接的な理解”にすぎなかった。だからこそ、実際に自分の目で中国を見て、現地の空気を肌で感じられることに、出発前から大きな期待を抱いていた。一方で、中国語は第3外国語として少し触れた程度だったため、「言葉も文化も異なる国で、ちゃんと交流できるのだろうか」という不安も、正直なところ少しあった。

上海、北京、山西省という三つの都市を巡り、現地の大学生との交流会や歴史施設の見学、文化体験を通じて得られた学びは、今振り返っても本当に貴重なものだったと強く感じている。

中国に行く前、私の中にあったイメージは正直なところ偏っていた。「爆買いする観光客」「反日感情が強い国」「人口が多くてせわしない都市」——そんな断片的な情報を無意識に信じ込んでいたように思う。特に、ニュースで目にする“抗日〇周年”という言葉から、若者も日本に対してあまり良い印象を持っていないのではないかと勝手に想像していた。しかし、訪中国として現地の大学を訪れ、中国人の同世代と実際に話してみると、そのイメージは大きく覆された。交流会では、日本語を学んでいる学生たちが私たちを温かく迎えて下さり、学生たちの日本語はとても流暢で、時に私たちが言葉を探す場面すらあったほど。それなのに、誰もが「まだまだ勉強不足です」「もっと頑張らなきゃ」と謙遜しており、その姿勢にまず驚かされた。そして何より印象的だったのは、彼らが日本語を学ぶ目的を「日中友好の架け橋になりたいから」と語っていたことだった。大学に入ってから日本語を始めたという学生がほとんどという状況にもかかわらず、日々の授業や日本のアニメ・新聞を通して言語を習得し、私たちとの交流を心から楽しみにしてくれていた。同世代の彼らの努力や想いに触れ、自分の中にあった偏見や思い込みの存在に気づかされたと同時に、これまでの私は、無意識に「中国人」とひとくくりにして相手を見ていたのかもしれないと思った。

また、街で出会った人々も温かく、親切だった。特に印象的だったのは、上海の田子坊で出会ったお土産屋さんの店員さん。観光客に笑顔で丁寧に対応しながら、ジェスチャーで一生懸命話しかけてくれた。日本でよく見かける“爆買い”のイメージしか持っていなかった私は、「中国には優しい人がたくさんいる」という当たり前の事実を初めて実感したように思った。

今回の訪中国を通じて私は、メディアやSNSを通して得る情報は、あくまで限られた一側面に過ぎず、それだけをもとに相手の国や人々を判断することの危うさを学んだ。

また、中国の大学生たちが「中日友好」について真剣に考え、努力している姿に触れ、私たち日本人自身も、隣国との関係をどう築いていくかを改めて考える必要があると感じた。そ

してその関係性を、私自身も築いていける存在でありたいと心から思った。自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じた中国。そこには、これまでの印象とはまったく違う、豊かであたたかい世界が広がっていることを、今回の訪中団に参加したことをきっかけに気づいた。この経験を通して得た気づきと、勝手な憶測で決めつけていた自分の反省を胸に、私はこれからも偏見を持たず、他者と真摯に向き合っていきたい。そして、日中の架け橋となるような学びと交流を、今後も大切に続けていきたいと思う。

『訪中を経て感じたこと』

2A 明治大学 児玉虎乃輔

一週間に及ぶ中国訪問は、長いようで実に一瞬で終わってしまった。本プログラムは、中国のさまざまな地に訪れることで、歴史的技術的高さを伺える側面と、人との交流による印象の変化、市民レベルの対面交流の重要性を感じることができた。以下、本感想文では、私が日中交流を通じて感じたことを記す。

まず第一に、私が驚いたのは中国という国のスケールの大きさだ。今回の旅で訪問した北京、上海、山西省は、どこも日本とは違い一つ一つの道幅の広さや、建物の大きさ、大学の敷地の広さなど、その規模感の違いに驚いた。新幹線に乗っていた時に、窓から見えた大きな岩山や草原など、日本ではなかなか見れないものだと感心した。

上海での船に乗った時は、高層ビルが立ち並び、夜にも関わらず鮮やかに光る建物の光量に圧巻した。日本とは雰囲気の違いのような、都心の発展さを見ることができた。一方、山西省に訪れた際に行った平遙古城は、数千年前から続く昔ながらな建物を見た。今もなおその敷地を利用する人々がいるという事実、中国の歴史の長さや、文化の継承をし続けることの凄さを実感した。上海と山西省に訪れたことで、最先端の都会と古来の建築物という時間的技術的にとても対照的な両観光地を見ることができ、中国という国の魅力を効果的に楽しめることができた。

次に私が感じたのは、対面交流の重要性だ。本プログラムが開始される前の事前研修では、日本と中国における戦争終了の捉え方が異なることを学んだ。日本では、終戦 80 周年記念というふうに表示される年であるのに対し、中国では、抗日戦争勝利 80 周年という風に表示されている。同じ戦争というテーマに対して、一方は勝ち負けを曖昧にした示し方をするのに対し、もう一方は、明確に勝利を示している。このような違いは、それぞれの国の歴史や経験、価値観や教育の違いからくるものであり、訪中中も、これはセンシティブな話題であったと言える。実際に教育の違いという点では、大学に国家主席の言葉や赤色が多いなど、主義的な違いを感じさせるところもあった。しかし、それ以上に感じたのは、現地の学生との交流をする上では、それらの違いは、何一つ影響を持たなかったという点である。国家や政治間では、互いに軋轢や問題があっても、自分と相手という個人の間には、友好しかなかったのだ。中国に行くというのは、他国に行くのとは比べて少し警戒心を持ったのは事実である。それらは実際に現状の情勢によるものから来るものであるが、本プログラムは、それらの警戒が、どの程度のバイアスや批判を生み出しているのかを考える経験になった。

約 100 人に及ぶ出身も学校も、全て異なる団員との交流は、たった 1 週間という期間にも関わらず、変え難い絆を手に入れることが出来た。今回私は、現地に訪問し、現地の人と交流をするという生の情報を手に入れることで、日本にいる時に考えていた中国とは違

う、良いところも悪いところも、知ることが出来た。この経験を元に、もっと対面交流を大事に、自分の経験で、判断できる人になりたい。

「自身の目で見た“中国”、そして、友好を未来へ繋ぐために」

2-A 明海大学 椎名晃一

はじめに、私は普段、中国語学科で中国語や中国の文化について学んでおり、その授業の中で日本と中国における価値観の違いを目の当たりにすることがある。また、近年では特に SNS で中国に対するネガティブな印象の動画もみられることもあり、その一方で中国人の先生との交流を通じて中国人の温かい人柄も知っている。

私は、日々の生活から、こうした日本と中国の価値観の相違や中国の人々がどのような人柄なのかを自分の目で確かめたいという思いが強くなり、訪中団への参加を決意した。

中国での七日間で最も印象深かったのは、現地の人々の温かさである。現地ではなるべく中国語でコミュニケーションをとろうと思い実行してみた。その際、声調が違うと「听不懂」と返されてしまうこともあるが、大抵の人は言いたいことを理解しようとしてくれたり、道を尋ねた際には、行き方を親切に教えてくれたりと優しい人々が多かった。また、ホテルやお店、観光地のスタッフに「早上好」や「谢谢」と言うと、「早」「不客气」「没事儿」などと笑顔で返してくれた。コンビニで買い物をした時には、気さくな店主さんが世間話をしてくれたり、店員さんに「你从哪来的?」と聞かれて「我是日本来的。」と答える場面があったりと、他国から来た私でもその場に馴染めているような気がして、現地の人々温かさが身に染みると同時に、コミュニケーションを取る上では言語の壁も低いのだと実感した。

中国での生活は、日本の生活との違いによる驚きと感動の連続だった。例えば食事の際、回転式のテーブルに大量の料理が次々と運ばれてきて、テーブルに収まりきらない場合は、料理皿と料理皿の上に隙間無く重ねられていく。この方法と量の多さに日本とのギャップを感じた。また、日本では箸は横向きに置くが、中国では縦向きで置くという点、味付けに油や香辛料が豊富に使われている点なども普段は味わうことのできない食文化の違いを実感できた。一方で中国の街並みは、都会のような地域では日本の何十倍もの高さの建造物が並んでいたり、田舎の方では陸と陸の高低差が数十メートルある地形が見られたり、と行く先々でまるで異なる国を転々としているかのような感覚すらあり、改めて中国が広大な土地を有していることを実感した。夜になると、都会の方では街の至る所がライトアップされ、昼間とはまた違った一面を魅せていて、中国の都市開発技術の高さが実感された。その中でも特に黄浦江でクルーズ船から一望した上海の夜の街並みは印象深い。その景色は目に映るもの全てが美しく煌びやかであった。

最後に、私は当初、中国及び海外へ訪れるということに少しばかり不安があった。確かに慣れない生活や食事により体調を崩すことや、お手洗いに洋式やトイレトペーパーがな

い、VPM と e-SIM が無いと SNS が使えないというように多少不便に感じることもある。だが、実際に現地に現地で生活してみると、それらがどうしてもよく感じる程、その国の人々の温かさや面白さ、その国がもつ独自の文化や魅力が見つかってくる。

そして、この旅を通じて、未来を担っていく私たちが意識すべきことは、先入観・偏見を捨てるということ、実際に様々な人とコミュニケーションを取ることで自分自身の視野を広げるということである。現地で私の目に映ったものは、他国から来た人でも優しく受け入れてくれる人々の温かさ、日本の文化を学び、日本が好きだと言ってくれる現地の学生たち、日中各国の良さを伝えてくれるガイドさんや友好協会の方々の姿であった。私は、この自分の目を見た“中国”を大切に、今後も日中友好関係に関わるイベントがあれば積極的に参加して、両国の友好の架け橋となっていきたい。

日中友好協会の皆様

この度は大変貴重な機会を設けて頂き、本当にありがとうございました。今回の訪中で、改めて中国の魅力や中国人の温かい人柄を実感することができました。私はこれからも中国の言語や歴史、文化に対する理解を深め、日中の友好を未来へ繋いでいきたいと思います。

「何度でも私を魅了する国、中国」

2A 立教大学 鈴木愛梨

豊かな自然、広大な土地、美しく深みのある伝統と歴史、温かい人情。私は今回の訪中を通して、改めて中国という国に魅了された。

以前、私は中国に半年ほど住んでいたことがあり、中国に対するイメージはもともと良く、中国の雰囲気がなんとなく好きだった。今回は、再度中国を訪問したい、様々なバックグラウンドをもつ人々と関わりたいという思いで訪中参加を決めた。この七日間、私たちは上海、山西省、北京を訪問し、観光や現地学生との交流活動を行った。

まず印象的だったのは、伝統と革新が混在する中国文化である。訪中のなかで、私たちは日中青年交流活動に参加した。日中双方から大勢の学生が集い、互いの文化やパフォーマンスを披露しあう大会である。中国学生は舞や京劇、武道などの伝統的な芸を披露してくださり、特に舞はしなやかで美しく、本当に宮女が舞っているようだった。華やかさと歴史の奥深さが融合した中国文化は、実に興味深く魅力的だと感じる。一方、街の様子や社会システムは非常に先端的で洗練されている。特に上海のクルーズ船で見た200万ドルの夜景には圧倒された。近代的なデザインの高層ビル、虹色に輝くライトアップ、広い道路など日本とは規模の違う先進的な光景が広がっていた。伝統と革新の共存は、中国文化がもつ唯一無二の魅力なのではないか。

そして人情の温かさを感じた。買い物をしているときに出口を案内してくれたスタッフさんに、谢谢と声をかけると不客气と笑顔で返してくれた。小さな売店の店主のおばあさんも中国語に不慣れな私たちを温かく見守ってくれた。現地学生は日本について興味津々な様子で聞いてくれ、中国のことを生き生きと話してくれた。会えて嬉しい、日本に行てみたいと笑顔で話す様子が印象的だった。また、訪中団を受け入れてくれた中国側のおもてなしにも感動している。円卓テーブルいっばいに並ぶ豪華な中華料理や歴史と伝統を感じられる観光地への案内など、私たちが心から中国を楽しめるような配慮をしてくださり、その思いやりを強く感じた。

日本のメディアのなかで、中国人はまるで我々の敵のように描かれる。反日感情を抱く人ばかりで友好とは程遠い人々のように見える。私はそのような偏見や先入観を抱いたまま中国を捉えようとする、本物の中国に向き合おうとすらしなことはとても悲しくもったいないことであると思う。そして決して中国人と一括りにするのではなく、ひとりの人間として敬意をもって向き合うこと、この姿勢こそが平和を構築していくために必要なことだと思う。近くて遠い存在になってしまっている今だからこそ、日中の友好は強く求められる。双方の架け橋となり、日中を繋ぐような存在になりたい。日中交流を通して学んだ、相互理解と自己理解の大切さを伝えられるような人になりたい。どのようなコミュニティのなかでも協調し合い、平和構築に貢献できるような人になりたいと強く思う。この七日間、周りの多才な仲間助けられながら、学びのある充実した日々を過ごせた。訪

中を実施するにあたって関係した全ての人に感謝の気持ちを表すとともに、貴重な機会を頂き参加できたことを誇らしく思う。

「私の目で見た中国」

2-A 山梨県立大学 萩原涼々香

私は今回、日中友好協会大学生訪中国として上海・山西省・北京の3つの都市を訪問しました。たった1週間とは思えないほど毎日が刺激と発見、学びに溢れており、まさにかけがえのない経験となりました。私にとって人生初の訪中であったこの旅は、中国に対するこれまでの漠然としたイメージや先入観が現地の人々との交流や文化体験を通じて大きく変化するきっかけとなりました。

まず上海では、黄浦江の遊覧船から見た外灘の夜景がとても印象に残っています。外灘は歴史的な建物と近代的な高層ビルが向かい合うように並ぶエリアで、上海の経済発展を象徴する場所のひとつだと学んだことはありましたが、実際にその風景を目にすると想像以上のスケールとエネルギーに圧倒されました。特に目を引いたのは、多くの建物が銀行名が掲げられていたことです。中国国内だけでなく、海外の銀行も多数進出している様子を見て、ここが国際的な金融の拠点として機能していることを肌で感じました。

次に訪れた山西省では、山西大学の学生との交流が最も心に残っています。初めての中国現地の同世代と直接交流する機会でしたが、国籍という壁を全く感じることなく、ただ純粋に「楽しい」と思える時間を過ごすことができました。彼らは思いやりがあり、優しく、そして非常に勤勉で、同世代の学生としてとても刺激的な存在でした。日本のキャラクターがモチーフとなったお菓子を交換したり、共通の趣味について盛り上がったりした時間は、言葉や文化の違いを軽々と越えて私たちを結び付けてくれました。WeChatを交換した学生とは帰国後も交流が続いており、このつながりを大切にしていきたいと思っています。

実を言うと、訪中するまでは日本国内の報道や周囲の意見に影響されて、「中国の人々と本当に仲良くなれるのだろうか」という不安を感じていました。しかし、山西大学での交流を通してその不安は完全に払拭されました。「国と人は別物」という実感を得て、国家間では歴史的・政治的な対立が存在していても、民間レベルの交流には確かな友好の芽があることに、希望を見出しました。私にとってこの1週間でもっとも印象深い思い出は、この山西大学での出会いです。

北京では、中国人民大学での式典や万里の長城の観光が行われました。中国人民大学の学生たちが日本語の歌を合唱してくれた場面では、その一生懸命な姿勢に心から感動しました。また、式典や観光地での何気ないやりとりも強く印象に残っています。拙い中国語で記念写真をお願いしたとき、現地の方が笑顔で私たちにポーズを教えてくれたことや、トイレで順番待ちをしていた際に、「時間がないでしょうから」と私たち訪中団を優先してくれた中国人女性の心遣いは、今でも忘れられません。旅の中で出会った人々はみな親切で、時には簡単な日本語を使って会話を試みてくれたり、私たちの立場に配慮した言動をしてくれたりしました。

報道では中国のネガティブな側面が多く取り上げられがちですが、実際に現地で接した中国の方々の姿は、まったく異なるものでした。振り返れば、訪中で数々の観光名所を巡ったものの、私にとって最大の財産となったのは「現地の人との交流」でした。これは普通の観光旅行ではなかなか得がたい経験だと思います。五感を通して知る中国は、これまでメディアを通して知っていた中国とはまったく違うものであり、私たち日本人と同じように感情を持ち、思いやりを持って接してくれる「ひとりの人間」としての中国人がそこにいました。そして時には、日本人にはない素敵な一面も持ち合わせていることに気づかされました。

この経験を通して得た中国の「本当の姿」を、これから自分の言葉で少しずつ、身近な人たちに伝えていきたいと思っています。これは私なりの小さな恩返しであり、民間交流のバトンを次につなぐ一歩だと考えています。

また、今回の訪中団には、日本全国から多様なバックグラウンドを持つ大学生が集まっており、そんな仲間と交流できたことも非常に刺激的でした。異なる価値観や考え方に触れたことでより広い視野を持つことができ、自分自身を見つめ直す機会にもなりました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださったすべての皆さまに心より感謝申し上げます。今回の訪中体験は、これからの私の人生において確かな指針のひとつとなると確信しています。

「訪中国に参加する前後での中国の見え方」

2—A 班

東海大学 平塚爽羽

私は今回 5/24～5/30 の七日間で中国の上海、山西省、北京の三都市を回り、本当の中国というものを目の当たりにした。隣国でありながら大陸が離れている故に気軽に行くことがかなわないことや、様々な情報に左右された結果、私の中の「中国」という国の造形が本当の中国とは異なっていたことが分かった。これから私が思い描いていた中国と本当の中国の違いを記していきたいと思う。

まず中国人は反日なのではないか、日本のことをよく思っていないのではないかという思いがあった。しかし山西大学、中国人民大学での学生交流でそのような事実はないとわかった。日本という国の文化や文字に興味を持ち、私たち訪中団の団員と日本語で会話してくれた。私たちが拙い中国語で質問したり、話しかけたりすると私たちが少しでもわかりやすいように日本語や英語も交えて教えてくれた。個人の感情は様々あるにしても、これからの中国を担っていく若者に日本を軽蔑するような眼はないと確信した。普段の中国の学生の暮らしを目の当たりにして、私ももっと頑張ろうと思えるようになった。同じ学生という立場としてお互いを高めあえるようになったらいいなと思ったりもした。

中日青年友好交流大会では、中国の大学生による様々なパフォーマンスを間近で見ることができた。日々の鍛錬なしではできない身のこなしがとてもかっこよかった。しなやかな動き、時には迫力あふれる素晴らしい伝統芸能を見せてくれた。中国の文化はとても興味深く、もっと触れてみたいと思った。

中国の人のやさしさは端々で見えた。例を一つ上げたい。

田子坊に行ったときにとあるお茶屋さんに入った。田子坊は観光地ということもあって、押し売りにあうのではないかと警戒していたが、私が入ったところはお茶の説明を丁寧にしてくれて、私が日本人だとわかると、日本語や英語を交えながら話してくれた。それがとてもうれしかった。自分の好みに合うお茶を無事に買えたし、また訪れたいと思った。中国の人とかかわって一番に感じたことは、彼らはとてもエネルギッシュであるということだ。上海の町がとてもきらびやかなこと、素晴らしい伝統芸能が受け継がれていること、田子坊での活気、平遥古城の町並みなどからも伝わってくる。中国の学生が熱心に勉強に打ち込めるのも、内なる強いエネルギーがあるのではないかと考えた。

結論として、個人の感情はそれぞれあるにしろ、中国人全員が日本に対して悪い印象を持っているわけではないし、日本でも一定数中国を嫌悪する者もいると思う。しかし特定の国や地域性に嫌悪感を抱くことがあることはあるし、ましてや実際にその地域に行ったことがなく、他人からの情報に惑わされて思い込みをしている状況を変えるべきなのではないかと考えた。今回の訪中団を通して、実際に中国の地に降り立ち、中国で生活する人とふれあって得た知見がたくさんある。本当の中国を知ることができてとてもよかった。ま

た、ただ旅行するだけでは体験することのできない学生との交流もできてとても良い経験になったし、これからもこのような機会があるなら参加していきたい。

「“中国人”ではなく“友”として」

2号車 A 班 静岡文化芸術大学 廣瀨波貴

私の親友は中国人である。彼女は、私がこれまで出会った人々の中で最も温かく優しさに満ちた人物であり、オーストラリアでの彼女との出会いが私の世界観を大きく変えた。彼女は私にとって「外国人、中国人」ではなくかけがえのない「友」であり、彼女が生まれ育った中国は私の愛する人がいる「愛おしい場所」となった。この経験もあって、私は国籍や文化の違いが人と人との関係において本質的なものではないことを感じていた。親友の存在に加えて、多種多様な「人」が混在し繋いできた中国史が中学生の頃から大好きで中国に対して自身は比較的良好な印象をもっていた。しかし、日本のメディアを見れば、「奈良公園の鹿」「尖閣諸島」など反中的な情報の数々。それらが事実である場合もあるだろうが、だからといって「中国人は悪い」「中国は悪い」と一括りにされることに、私はどうしても抵抗を覚えた。とはいえ、本当の中国を自分の目で見たことがなかった。オーストラリア留学で無知である羞恥と恐ろしさを真に感じてきた私は訪中団の募集を見ても経っても居られなくなった。親友の故郷を自分の目で確かめ、本当の中国を知るために参加した訪中団で印象に残った事をここからは綴っていきたいと思う。

私が初めて足を踏み入れた中国の都市、上海。その印象を一言で表すなら、「圧倒」だった。ドイツから導入されたリニア、EV車の普及を促すナンバープレート制度、ジンマオタワー88階からの眺望、そして上海バンド（外灘）の豪華絢爛な景観—それらの全てが、人の手によって造られたものだという事実、ある種の恐怖すら感じるほどであった。何もかもが規格外に大きく、高い。この感覚は、万里の長城や雲崗石窟を訪れた際にも同様に覚えたものである。加えて、都市全体が綿密に区画整理され、公共施設や交通機関も整然としており、都市機能の統制の高さに驚かされた。特に、EV車・EVバイク（電動バイク）の高い普及率には感心させられた。EVバイクについては、山西大学の学生との交流の中でも話題に上がった。学生たちは学内でEVバイクを日常的に使用しており、4万円前後で購入できること、学内であればヘルメットなしで乗っている事、寒さ・日焼け対策として布団のようなカバーをバイクに取り付けていることなど、日本ではあまり見られない光景であり、非常に興味深く感じた。中国では、EVバイクが老若男女問わず普及しており、世界全体のEVバイク市場の売上のおよそ7割を中国が占めているという話も聞いた。私自身、ヤマハ発動機やスズキといった企業の創業地である地域の出身であり、この分野において興味があったため、変化し続ける中国市場のニーズに柔軟に対応しなければいけない日本の自動車産業の課題についても考えるきっかけとなった。また、都市インフラやデジタル化の面でも、地域による差こそあれ、日本以上に進んでいると感じる場面が多々あった。そして「日本は20世紀の技術に固執し、EV化やデジタル化の波に乗り遅れ

た日本に対して、「良いものはすぐに取り入れる」中国の柔軟性と情報感度の高さが、今の成長を支えているのだと実感した。

田子坊や平遥古城などでは、ショッピングの時間も設けられていた。支払いは基本的にすべてオンライン決済であり、微信か Alipay が主に使われていた。あるお茶の専門店では、Alipay でしか注文・決済ができないシステムになっており、完全にキャッシュレス化されていた。ただし、決済時にエラーが発生したり、クレジットカード情報が登録できない場面もあり、そうした状況ではやや不便さを感じることもあった。高齢者や子どもには使いづらいのではないかとも思ったが、私が見る限り、彼らもスマートフォンを器用に操作していた。一方で、こうした高度なデジタル化の裏には、日常的な情報収集や監視の存在があることにも気づかされた。入国時には指紋と顔写真の登録が義務づけられており、街中の至るところには監視カメラが設置されていた。情報を提供することで、安全や利便性を享受する——それが現代中国における社会構造の一端なのだと実感した。

中国での 1 週間は私にとって大きな刺激になった。「近くて遠い国」「約 2000 年の友好と 50 年の対立」、そんな言葉を覆すほどの温かい人々との交流があった。現地の大学生、偶然言葉を交わした一般の人々やお店の従業員の方々、誰もが自然体で接してくれ、いわゆる「反日感情」や「政治的対立意識」といったものは一切感じられなかった。「政治」や「異文化理解」といった難しいことはさておき、まずは沢山のひとと知り合い言葉を交わし、交流を重ねる事の重要性を強く認識した。私は、何を言われても愛する親友と今回の訪中国で出会い友となった人々の故郷である中国が好きだ。愛する人が暮らす場所に敵意を抱くことは私には到底考えられないし、そこに暴力を向けたり爆弾を落としたりすることなどなおさらあり得ない。世界平和も日中友好の鍵も、国外に出て愛するモノや人に出会う事にあるのではないか。最後に、日中友好協会及び中日友好協会の皆様、現地のガイドの皆様、全国から集まった友人、及びお世話になりました全ての関係者の皆様に感謝を申し上げます。

「日中友好」

2-A 静岡文化芸術大学 松永心唯

まず初めに今回の活動に関わっている全ての方に感謝を申し上げます。日中両国の多くの人々の尽力によって貴重な機会に恵まれ、7日間の素晴らしい経験をさせて頂きました。今回、私が感じた様々な思いを忘れず、何らかの形で日中友好の一端を担い、社会や自分の身の回りに還元していきたいと考えています。以下は訪中の感想と、今回の活動を通して考えた日中友好について書きます。

実際に訪れた中国は、私が想像していた中国とはかなり違いました。最初に訪れた上海は、これくらい都会だろうと自分が考えていた数倍は都会でした。とにかく高いビルがとにかくたくさんあって、見上げすぎて首が痛くなりました。黄浦江の遊覧では、360度視界が煌びやかで、中国経済の規模の大きさを体感しました。上海歴史博物館では、上海の長い歴史と目覚ましい経済発展を学びました。

次に訪れたのは山西省です。私は自然が好きなので、緑あふれる山西省は今回訪れた中で一番好きになりました。特に普祠は本当に自然の景色が綺麗で、穏やかで、絶対また訪れたいと思いました。平遥古城も、歴史を感じる建造物がずらりと並んだ道なりは大変壮観でした。屋根には可愛いすずめが歩いていて、この子には国境という概念はないだろうなあといろいろと羨ましくなりました。山西大学では、日本語学科の学生が学校を案内してくれました。中国の大学は本当に広いです。またペアになった学生の方は私と同年だったのですが、本当に日本語が上手なうえに驕らず、「自分なんてまだまだです」と完璧な謙遜までされていて、頭が上がりませんでした。中国の厳しい学歴社会については聞いたことがあったものの、中国人学生の真面目さ、勤勉さ、優秀さをリアルに感じる交流でした。自分も頑張ろうと刺激を受けました。

最後に訪れたのが北京です。北京では中日友好交流大会に参加し、万里の長城に登りました。中日友好交流大会では、日中の学生がお互いにパフォーマンスを披露し、また今回の活動、日中友好に関してスピーチを発表しました。拙い感想になりますが、同年代の日中それぞれの学生の思いに感動して、日中友好を祈らずにはいられませんでした。万里の長城に関してはとても人が作ったとは思えない雄大さで息をのみました。どれくらいすごいのか問われたら、実際に見てもらわなければならないくらい、文字には表しきれないくらいの驚きでした。

三都市を巡って、国が大きいからこそ、一口に中国と言っても地域ごとに全く違う顔があるのだと気付きました。しかし、歴史、経済、自然など様々な側面がどれも一貫してスケールが大きいことは共通していると思いました。中国という国の規模の大きさをを感じる経験でした。またどの土地でも、中国の人々の優しさに触れて驚きました。私は歴史や政治の面や、メディアの情報などから、日本人は中国人に嫌われているのではないかという不安がありましたが、今回の訪中で出会った人は皆さん優しく暖かく、そんな不安はいつの

間になくなりました。またお店で働いている方々は、お客さんが来るまでご飯を食べていたりお化粧をしていたり自由にされていて、私が商品を見ていると話しかけてくださり、中国語が拙い私とも頑張って会話をしてくださいました。私は中国人に対して、笑顔が素敵で、優しく気ままで、懐が深い、そんなイメージを持ちました。しかし7日間で私が見た中国も、ほんの一部かもしれません。今後もっとたくさん色んな中国を知っていきたいです。

団長は民間交流の大切さを説き、民間交流を「最後の砦」と表現されていました。本当にその通りだと思います。中国と日本は長い歴史があり、私たちが目を背けてはいけない戦争の歴史も抱えています。政治の問題も残されています。このしがらみの中で平和を実現するには、国民一人一人の意識が大切だと思います。今はまだ困難で、理想論過ぎる発想かもしれませんが、いつか両国に偏見のない世代が生まれ、とても暖かな友好関係を育める日が来ることを願ってやみません。